

マルティヌーの室内楽

曲目解説:山野雄大

【1:チェコ時代の作品(～1922年)】

マルティヌーは1890年12月8日、ボヘミアの(モラヴィアとの境にあたる)小さな町・ポリチカ生まれ。

まずお聴きいただくのは「弦楽四重奏曲 第1番 H.117《フレンチ》」(1918年)より。第1楽章では、同じチェコの先人ドヴォルザークの音楽を思わせませんが、これに続く楽章では、彼が学生時代から影響を受けたドビュッシーなども思わせることから、《フレンチ》と呼ばれることも。

歌曲集《ニッポナリ》H.68a(1912年)は、日本語からドイツ語に、さらにチェコ語に重訳された詩集から歌詞をとっています。本日は3曲をお届けします。

まずドビュッシーの影響も色濃いく(青い時)の原詩は『万葉集』にある額田王(熟田津に 船乗りせむと月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな)とされていますが、歌詞を重訳してみると「こんな不思議な ゆるやかな 眠たげな空気のなかで / 月が山のへりを 頂へと のぼりゆく / 夜と 愛の夢とを連れて！」といった別世界に。

(老年)の原詩は藤原公経。「かつて我が黒髪は 風に散る雪の花に飾られていた / おお、なんと美しかったことよ！ / なのに いま我が髪を飾る雪は 風花のそれではない / ひと日 ひととせ ひと日 ひととせが降り積もり / この白い髪を編んできたのだ」……これは『百人一首』収載の(花さそふ 嵐の庭の 雪ならで ふりゆくものは わが身なりけり)が原詩。

そして、プッチーニのオペラ《蝶々夫人》からの影響も指摘される(雪の上の足跡)。「氷つく吉野山へ まぶしい雪を踏み分けてゆくと / あのひとの足跡を見つけた / 星の輝くなかで 岩山を登っていったあの人を / わたしは心で追いかける」……原詩は静御前(吉野山 峰の白雪 ふみ分けて 入りにし人の 跡ぞ恋しき)です。

【2:パリ時代の作品(1923～1940年)】

マルティヌーは、1923年にパリへ居を移します。作曲家ルーセルに師事したほか、ストラヴィンスキーや「六人組」と呼ばれるフランスの若手作曲家たちの音楽を間近で浴び、さらにジャズの魅力を知ります。

この時代のバレエ音楽《調理場のレビュー》H.161(1927年)。主人公は調理道具たち。——深鍋と鍋蓋の結婚を邪魔するクリーム泡立て器、鍋蓋を誘惑しようとする雑巾を邪魔する箸。喧嘩の巻き起こる台所に、突然大きな足が現れて……。本日は(1:プロローグ)、(2:タンゴ)、(3:チャールストン)、(4:終曲)という組曲版(1930年)を。

【3:アメリカ時代の作品(1941～1953年)】

マルティヌーは戦禍を逃れてアメリカへ亡命。異国での不自由に苦しみますが、創作は見事な成熟をみせます。「ヴァイオリン・ソナタ 第3番 H.303」(1944年)の第3楽章(スケルツォ)は、自由なシンコペーションを取り込んだリズム、それを生かして動的な魅力をたたえたメロディ……。古典的なたたずまいにも新鮮な躍動が溢れます。

異郷で書かれながらいよいよチェコ色の強いものになった「チェロ・ソナタ 第3番 H.340」(1952年)は、お聴きいただく第1楽章にも、幼い頃、ポリチカで日々聴いていた鐘を遠く追想するような響きもあれば、詩情と郷愁に溢れたメロディが豊かなリズム感に溶けてゆき……。

【4:戦後ヨーロッパ時代の作品(1953年～)】

戦後も諸事情が重なりマルティヌーは故郷へ戻れませんでした。それでもパリへ、ニースへ、ローマへ……と陽光を深呼吸するマルティヌーは、いよいよ晩年の自在な創作へと足を進めます。最後はスイスに居を移し、1959年8月28日に胃癌で亡くなるまで同地で暮らした作曲家は、最期まで音楽への愛を深め続けていました。

「ヴィオラ・ソナタ H.355」(1955年)の全2楽章から後半の第2楽章を。ヴィオラの魅力的な音色を活かしながら、自由に彷徨うような音楽の展開、ピアノに頻出する特徴的な音型など、奔放さを巧みに繋ぎ高める着想……。抒情の先へ新世界を拓く作品です。

そして、最後は「ヴァイオリンとチェロのための二重奏曲 第2番 二長調 H.371」(1958年)。ストラヴィンスキーの音楽も懐古するような第1楽章アレグレット、どこか病を思わせる重さもある第2楽章アダージョ、そして第3楽章ポコ・アレグロでは故郷の音楽を彷彿させるような……期せずして彼の生涯を振り返るような音楽で、本日はお別れです。

このコンサートをきっかけに、マルティヌーの膨大な作品群——まだまだ魅力的な傑作が山のように待っているその世界へ、さらに興味を深めて下さいますように。